

いにしへの映画つれづれ ②5

撮影中の事故

千葉豹一郎

2021年、俳優のアレック・ボールドウィンが映画の撮影中に撃った小道具の銃で、女性の撮影監督が死亡、監督が重傷を負うという痛ましい事故が起きた。ボールドウィンは引き鉄を引いていないと主張しているが、銃には実弾が装填されていたと報道された。この事件は当初から謎が多く、さまざまな憶測を呼んだ。基本的に引き鉄を引かなければ発火することはなく、ボールドウィンが銃規制派なので銃の扱いに不慣れだったことが原因であるかのような見方も取りざたされた。しかし、小道具の銃に実弾を入れるなどあり得ないことで、そもそも撮影現場に実弾を持ち込むこと自体が非常識きわ

まりない危険な行為である。

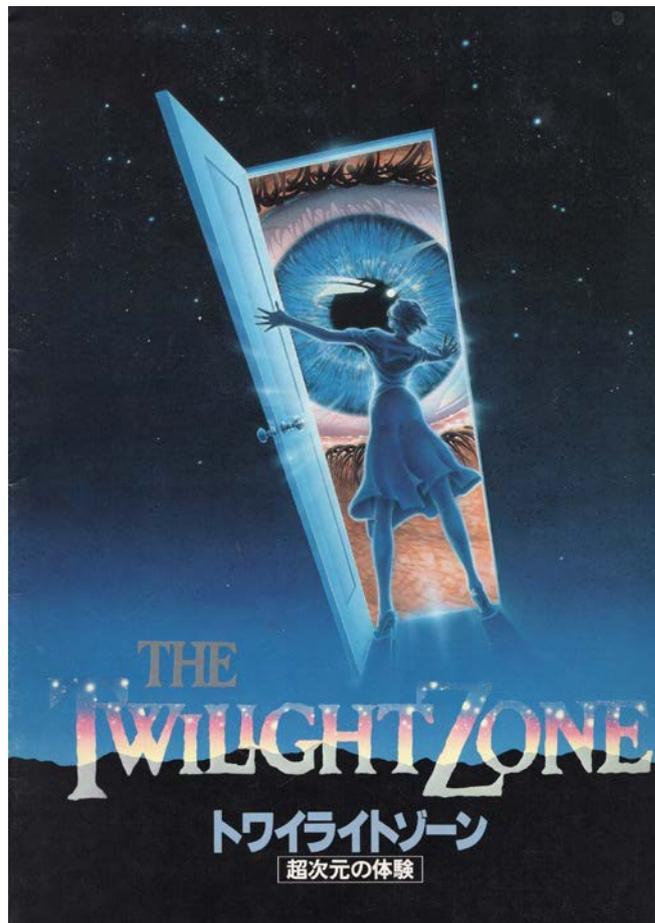
ブルース・リーの息子ブランドン・リーも「クロウ／飛翔伝説」(94)の撮影中、同様の事故で死亡している。こちらも当初は実弾が入っていたと報道されたが、いくつものミスや不注意が重なった不幸な事故だった。

アメリカでは発砲シーンに実銃を使うのが通常で、それだけに撮影用の銃を専門に扱う会社もあり管理も厳重で安全については何重にも注意が払われている。機関銃やオートマチック（自動拳銃）の場合は、空砲で銃を作動させるために銃身内にチョークという詰め物するか内側を細く作り替えた銃身に替えてガス圧を上げるなどの加工が必須

となるため、実弾を発射することはほぼ不可能だ。一方、リボルバー（回転式拳銃）の場合は大方は無加工で、空砲を入れるだけなので実弾を装填すれば発射可能だ。上記の事件も近年は珍しい西部劇で、問題の銃もリボルバーだった。ただ、ニューヨーク州など銃規制の厳しい所では、小道具でも実弾が入らないよう弾倉内を細くするなどの加工が必要となる。日本のモデルガンも、対米輸出もあることから改造防止のため最初から弾倉をわずかに細く作ってある。とはいえ、かつては弾着などの技術が未熟だったこともあって実弾を使うことも多く、死亡事故も起きていた。トーキーの初期、ギャング映画で一世



先頃リバイバルされた「殺しの分け前／ポイント・ブランク」(67)。斬新な映像とリー・マーヴィンの個性が全開！同じ原作の「ベイバック」(99)のメル・ギブソンなんか目じゃない。



最悪の事故が起きたテレビ「ミステリー・ゾーン」の映画化「トワイライトゾーン／超次元の体験」(83)。

を風靡したジェームス・キャグニー。「民衆の敵」(31)の撮影が始まった直後、監督の判断で主演と役を交代し、それが大好評で出世作となった。その中で、キャグニーがビルの角を曲がった直後、機関銃の掃射で壁の一部が粉々に碎ける場面があり、どうやって撮ったのだろうと思っていた。キャグニーの自伝によれば、何と第一次大戦で活躍した機関銃の名手の実弾を撃ったのだという。キャグニーの代表作のひとつ「汚れた顔の天使」(38)でも監督が実弾を使おうとしたが、悪い予感がして拒否。はたして、キャグニー頭があるはずだった位置に跳ね返った弾丸が当たり、監督が絶句したという。他にも実弾を使ったとしか思えない作品がかなりあった。戦後も実弾を使うことが少なくなかったようで、そういう場合は武装警官が立ち会うことになっていた。ここ何十年かは実弾を使うことはなくなったようだが、空砲でも至近距離だと花瓶が割れるくらいの威力があるため気は抜けない。間近で人に発砲するシーンでは、火薬の量を減らしているのがはっきり判り、わずかにずらして撃ったりもしている。名匠ウィリアム・ワイラー監督の傑作「探偵物語」(51)でも、主演のカーク・ダグラスがラストで撃たれるシーンをワンカットで撮ろうとしたが、ダグラスがその位置で新聞紙をかざして発砲したら何十か所にも穴が空いてカットを替えることになったという。実銃ではあまり出ない火や煙をわざわざ出すのは、映像効果や銃声の効果音を入れる目安にするためで、火や煙をどれくらい出すかは監督の好みだ。西部劇などでは一メートル近く勢いよく火を吹いていることも多く、こうしたシーンでは望遠で撮っているようだ。スティーブ・マックィーンの出世作「拳銃無宿」では、ウィンチェスターを短く切った通称ランダル銃にマックィーンの独断が火薬を詰めすぎて、スタッフの帽子が吹き飛んだという。マックィーンが難聴になったのは、耳栓もせずにランダル銃の練習に励んだためともいわれる。ブルース・ウィリス

も「ダイ・ハード」(88)の撮影中に発砲シーンで耳栓をせずに難聴になっている。1960年代の映画雑誌の消息欄には、死亡や病気、結婚、離婚などと共に撮影中の事故の記事がよく出ていた。「0011 ナポレオン・ソロ」のロバート・ヴォーンが、撮影で訪れたロンドンのパブでチンピラに因縁をつけられて殴られたとかの話もあったが、よく見かけたのは爆発や暴発による事故の記事だ。大量の火薬を使う戦争物や西部劇を含めたアクション物などはつねに危険が伴い、事故と隣り合わせだ。ヘルメットがもっとも似合うといわれたロバート・ミッチャムが、模擬弾が当たって鼻にケガを負ったとの記事もあった。模擬弾は帽子などを飛ばすためにカメラの後ろから空気圧で撃つ銃で、弾は蟬でできている。最悪の事故として有名なのは、「トワイライトゾーン／超次元の体験」(83)の撮影中、火薬を用いる模擬弾が当たって墜落したヘリコプターに巻き込まれ「コンバット！」のヴィック・モローと子役ら3人が即死した事故だ。衝撃的な事故の映像はさすがに本編には使われなかったが、ニュースなどで流されたのでご記憶の方も多いだろう。モローは「コンバット！」の撮影中にもたびたびケガをしていて、戦争物は俳優も大げさにいえば命がけといってもいいだろう。ミッチャムの「アンツィオ大作戦」(68)でも多数のケガ人が出て、マーク・ダモンが脊椎骨折の重傷を負っている。また「陽動作戦」(61)のフィリピンロケ中、主演のジェフ・チャンドラーが落馬事故で負傷（休憩中にエキス

トラ出演した兵士とのキャッチボールによるともいわれる)。それが原因で帰国後に手術するも、敗血症で死亡した。医療過誤だったらしいが、撮影時の事故に起因することは間違いない。落馬事故は西部劇に多く、オードリー・ヘプバーンも唯一の西部劇「許されざる者」(60)の撮影中に落馬し流産している。銃の暴発も多く、「殺しの分け前／ポイント・ブランク」(67)のシャロン・アッカーやアンジー・ディッキンソンをはじめ女優がケガをしたという記事がやたら目立った。一様に何針のケガとあって、前述のように空砲の威力を物語る。暴発といっても引き鉄を引かなければ発火しないはずで、西部劇の早撃ちなどで引き鉄を引くタイミングが早過ぎて足などを撃ってしまうことはあり得る。女優の場合は俳優に比べて銃の扱いに不慣れなことも多いだろうが、こうした早撃ちの場面がない現代物ではコーチも付いているはずだから、どういう状況だったのか首をかしげる。この頃の映画雑誌のスナッフでは銃



事故が多発した「アンツィオ大作戦」(68)のプレスシート。

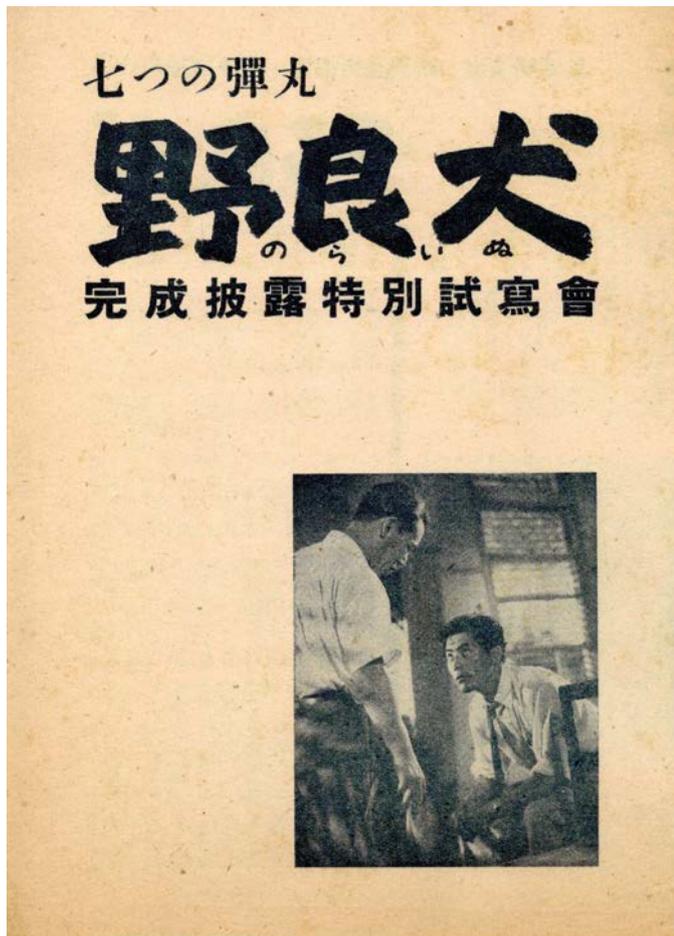
いにしえの映画つれづれ

を持ってふざけているスナッフがよく載っていたので、こうした不注意が原因だったのかもしれない。「刑事コロンボ」の「ルーサン警部の犯罪」でも犯人の俳優が小道具室に忍び込んで銃を持ち出すシーンがあり、当時はまだ管理が甘かったようだ。こうした事故の多発もあり、近年ではかなり厳重になっている。ハリウッド映画に出演した日本の女優によれば、発砲シーンを撮り終えたら一歩も動かないように指示され担当者が銃を回収していったそうで、州によっては小道具の銃を扱うためにはいくつものライセンスが必要となっている。冒頭の事件では、インディペンデント映画で予算が乏しかったため、こうしたライセンスが不要の州で撮影され、ライセンスを有しないスタッフが担当したことが事故につながったという。いずれにしても、実弾さえ持ち込まなければ最悪な結果は避けられたはずで、あってはならないことだ。

日本でも戦前や戦後間もなくは実銃が使

われることが多く、黒澤明の「野良犬」(49)の三船敏郎、「多羅尾伴内」シリーズの片岡千恵蔵、これが遺作となった「紅の拳銃」(61)の赤木圭一郎などその手に実銃が握られていた。昭和30年代の中頃までは何と警察に頼むと警官が立ち会いの下に実銃を貸してくれたそうで、鷹揚な時代だった。もっとも、実銃は主役級だけで、その他は戦後に開発された電気着火式の銃（以下 電着）が使われていた。銃や火薬の法的規制が大変厳しい日本ならではの産物といってもいいだろう。真鍮にブロンズメッキを施した銃の内部に電池が組み込まれ、引き鉄を引くと電線が入った花火に着火して火と煙が出る仕掛けになっていて、実銃のように作動はせず発射機能も一切ない。初期型はモナカと呼ばれた左右を張り合わせたもので止めネジが見えていた（笑）。無国籍アクションで一世を風靡した日活で多用されたことから日活コルトと呼ばれ、他社でも使われた。日活コ

ルトはありそうでない子供が画いたような実在しないコルトに似たオートマチックだったが、他のモデルを模したものやリボルバーなどいろいろな種類があった。電着用の花火は火薬量も少なく実銃用の空砲とは比べものにならないので、前述のような暴発による大ケガなどはほとんどなかったようだ。戦争物でも「独立愚連隊」(59)など独特の作風で知られた岡本喜八監督は従軍経験もあって安全管理を徹底していたため、一度もケガ人が出るような事故はなかったと主演俳優の佐藤允が語っていた。ただ、事故が表に出るのは大事故か有名俳優が当事者になった場合だけのようで、弾着などによる事故は結構あって内々に処理されることが多かったらしい。日活の映画によく出演していたE氏（故人）の奥さんの話では、結構危ないこともやらされたと生前に語っていたそうだ。モデルガンが出来てからは電着と併用されることも多かったが、改造による事件などの多



大変珍しい黒澤明の「野良犬」(49)の完成試写会のチラシ。当初は「七つの弾丸」の副題がついていた。



小林旭も撮影中、たびたびケガを負っていた。手に握っているのが電着。手前は「フォーリーブス」の江木俊夫。

発を受け昭和46年の銃刀法改正で黒色の金属製の銃は使用できなくなった。発射機能のない電着も対象に含まれ、撮影現場には混乱が広がった。法律に従って黄色や白に塗った銃が出てくることもあり苦笑を誘った。しかし、すぐに合法的なプラスチック製の電着やモデルガンが登場し、近年ではCGなどの技術の発達で煙や火を入れ込むことが可能となって格段に安全性が増している。

日本の場合は、銃よりもむしろ時代劇などの刀による事故が多い。カッターを替えて撮ることが多い銃と違い、立ち回りでは体に当たることもしばしばだ。大人数が絡む合戦シーンでは、振り上げた刀の切っ先が背後の俳優の眼に入って失明する事故も起きている。こうしたシーンでは不慣れたエキストラなどが混じっていることも多く、いっそうの慎重さが求められる。竹光とはいえ当たればケガをし、時代劇スターは生傷が絶えなかったという。絡みと呼ばれる斬られ役と呼吸が合わないといけケガにつながるため、ベテランでは慣れた絡みを指名することも多いようだ。かつては強度の近眼で絡みに当たることの多い大御所や、迫力を出すために故意に当てる大御所もいて、厚着をしたり内側に物を入れたりして対応していたという。また、刃引きと呼ばれる刃を落とした真剣を使うことも珍しくなかった。「座頭市」(89)では、これがデビューとなる新人(故人)が真剣を使い誤って絡み役の俳優を死亡させる事故が発生した。真剣は迫力を出すために持ち込まれたらしいが、不慣れたスタッフがこれまた不慣れた新人に持たせてしまったのが事故の原因だったといわれる。重みを出すために真剣の脇差を差すことやアップで使うことはよくあったが、立ち回りに真剣を使うのは実弾と同じくらい危険な行為だ。以後、アップでも金属製の模造刀を使うようになり、真剣を見かけることはほとんどなくなった。見る人がみれば模造刀であるのは一目瞭然で迫力不足は否めないが、安全のためには致し方ないだろう。

格闘シーンでの事故は日常茶飯事で多く

は軽傷レベルだが、骨折などの重傷を負うケースも少なくない。4度目の映画化となる「スポイラーズ」(42)の撮影中、ジョン・ウェインとランドルフ・スコットが諍い、映画さながらに本気で殴り合って共に骨折する重傷を負った。若気の至りだったようで、後に2人は無二の親友となって西部劇を大いに盛り立てたのは周知の通りだ。ウェインは60年代以降になると、転倒などでたびたびケガをして撮影が延びることが少なかった。肺ガンの手術後はさまざまな病気にも見舞われ、入院や手術の記事を一番よく見かけたのはウェインとリズ・テイラーだった。いずれにしても、激しい動きがともなう撮影は事故が起きる前提での安全対策が求められる。

これら以上に危険なのが水の事故で、死に直結する。クリント・イーストウッドの出世作「ローハイド」で主役のフェーバー隊長を演じたエリック・フレミングが、66年にペールでロケ中に溺死。日本でも、昭和30年代に手錠で繋がれた2人の逃亡犯が川を渡るシーンの撮影中に流されて溺死している。このうちの1人はスタントマン上がりだったが、どちらかが川底で滑ったらしく遺体が発見されたのは10日後のオリンピックの開会式の当日だったという。平成の初めにも重い鎧を着たエキストラの俳優がリハーサル中に淹つばに落ちて溺死する事故が起きている。

伝説の大女優原節子も、撮影中の事故に遭遇している。昭和20年代末、原の主演映画の撮影中、原も乗った列車を正面から撮るはずだったカメラマンが轢かれて死亡した。夜間撮影用のライトに目がくらんだ運転士が、ブレーキをかけ遅れたためだった。そのカメラマンは原の実兄で、監督も義兄が務めていた。スタッフが事故を会社に急報した際、返ってき一声は「ミッチェル(アメリカ製の高級カメラ)は無事か?」で、強い憤りを覚えたのも当然だろう。リハーサルもななくぶっつけ本番だったことが主因で、人命や安全を軽視した姿勢は強く非難されて然る

べきだろう。原はその後も気丈にふるまっていたが、このとき引退の意志を固めたのではないのか?しかし、実兄の家族の面倒を見るために女優を続けざるを得ず、昭和38年に引退したときは事故に対する記憶も薄れていたため、謎の引退といわれたのではないかとの指摘もある。

平成の初めにも、ドラマの撮影中に俳優Tの運転する車が立木に激突し、投げ出された音声スタッフが車の下敷きになって死亡し、Tや同乗の俳優らも重傷を負う事故が起きた。当該の車を別の車で牽引するなどの通常の撮影方法を採らず、ライトで目がくらんだことが事故につながった。さらに定員オーバーや公道での撮影許可も申請していなかったなど、いくつもの法令違反も明らかになった。監督の指示に従った俳優に全責任を負わせる不当性も叫ばれ、日本俳優連合が多くの署名を集めたためTは比較的軽い処分で済んだ。しかし、Tは謹慎を余儀なくされてドラマもお蔵入りとなり、労務管理などをめぐる国会でも取り上げられる事態となった。いずれも、起こるべくして起きた事故で、かつては撮影中のケガを名誉の負傷であるかのように称賛、あるいは自慢する空気もなかった。以上に挙げたのもほんの一部で、大勢の人間が立ち働く現場ではさまざまな事故が起きやすい。たびたび非難されているにもかかわらず、昨今もバラエティー番組などで事故が多発している。関係者は過去の多くの事故を教訓に、根底から意識を変える必要があるだろう。

著者紹介

千葉豹一郎

作家・評論家。著書に「法律社会の歩き方」(丸善)「スクリーンを横切った猫たち」(ワイズ出版)(電子版はアドレナライズ)「昭和30年代の備忘録(電子版)」(ユニワールド)「猫と映画人(電子版)」(アドレナライズ)等の他、「東京新聞」「ミステリマガジン」(早川書房)「猫生活」(緑書房)等をはじめ連載も多数。独特の切り口で草創期からの外画ドラマの研究や紹介にも力を入れている。